

2017年度 産業研究所  
高知県安芸市まちづくりプロジェクト  
参加学生 報告書

関西学院大学 産業研究所

## ■プロジェクトの概要・目的

「じゃこ（関西方面ではしらす）の聖地」として名高い高知県安芸市における一大イベント「全国ご当地じゃこサミット」の運営参加を通じて、まちおこしについて学びます。

安芸市では、進行する人口減少に対抗するために、地域に焦点をあてた地域ブランド化施策を実施しています。特産品としては日本屈指の生産量を誇るナス、柚子、じゃこ（しらす）などがあり、歴史資源としては「岩崎弥太郎の生誕地」などのPRを行っています。中でもじゃこの聖地化は、2009年からの活動の中で全国サミット「じゃこサミット」の展開を行うなど、メディアからも注目を集め始めています。

今回のプロジェクトは、集客イベントを通じて地域と学生が連携し、特産品であるじゃこを活用した新しい地域の話を作っていこうという企画です。

## ■活動内容

### ①「実行委員会」へのヒアリングとレポーティング

じゃこサミットを主催する市民団体「ちりめん井楽会」や市役所等に対してヒアリングを実施し、現状の課題、今後のあるべき姿などを模索します。

### ②「じゃこサミット」におけるボランティアサポート

参加者は、ボランティアスタッフとして、じゃこサミットをサポートします。

「じゃこサミット」とは…

今年で5回目を迎える全国で唯一「じゃこ」にテーマをしばった全国規模のフードバトル。合計15店舗以上が全国から集結して、消費者の投票によってグランプリを競っています。去年は2日間で2万人が訪れました。



## ■日時

日時：2017年10月7日（土）～8日（日）

事前説明会：10月5日（木）12:45～13:20 西宮上ヶ原キャンパス池内記念館

## ■参加者

商学部1名（1年生）

経済学部1名（2年生）

法学部2名（3年生、4年生）

社会学部1名（3年生）

## ■参加学生の目標（各自が設定した参加当初の目標）

- ・じゃこを通じたまちづくりに関わる方々がどのように地域を盛り上げようとしているのか、どういう思い・考えで取り組んでるのかを理解し、自分に何ができるのかを考える
- ・地域で活躍する方々とのコミュニティーをつくる、イベントを企画したきっかけや地域への思いを聞く、私たち学生ができることを考える
- ・まちづくりがどういうものなのかをしっかりと勉強する
- ・安芸市で行われているじゃこサミットの現状を現地の人から直接聞き、又、安芸市の人から他地方から来る学生ボランティアに求めることを聞くこと。さらに、現地の人に馴染んで、少しでも学生ならではの若さと力で、貢献できることを見つけ、行動すること
- ・安芸市の現状を捉えたあとにヒアリングを行うことで、安芸市が取り組むべき課題を見つける

## ■実施内容（学生の報告書より）

### <10月7日（1日目）>

- ・じゃこサミット見学・安芸市の観光、じゃこサミット関係者ヒアリング
- ・安芸市じゃこサミット会場にて試食、安芸市観光、安芸市の方々との大懇親会
- ・じゃこサミットに客として参加
- ・じゃこサミットにお客さんとして参加し、高知観光、夜は懇親会で聞き込みと交流
- ・じゃこサミット見学、出展者や協賛者にヒアリング

### <10月8日（2日目）>

- ・じゃこサミットサポート（ボランティアスタッフとして参加）
- ・じゃこサミットの運営スタッフ
- ・じゃこサミット、ボランティアとして参加
- ・実際にスタッフとしてじゃこサミットで働く、片付け
- ・じゃこサミットにボランティアとして参加

## ■参加学生がプロジェクトを通して学んだこと

- ・しらすサミットに関わらせて頂いたり、お話を聞かせて頂くなかで、まちづくりに一番大切なことに気づくことができました。それは、人と人との繋がりです。内部の人が繋がって周りを元気にして、そこに外部の人との繋がりをどう広げていくのかが重要だと思いました。香川から来られた出店者の方が「しらすサミットには利益よりも楽しさがある。」と言われていました。他にも熊本から出店された方は、熊本にある本店を3連休の間休みにして、しらすサミットに参加されていました。利益のことを考えると、本店を開けた方がいいのに、それでもしらすサミットに参加するというのにはそこに利益以上の楽しさであったり、繋がりや深さがあるんだと思います。しらすサミットは出店者だけでなく、市役所の方や高知銀行の方など多くの人にとって繋がりや場になっているんだと感じました。そういった場になっているからこそ続けられるし楽しく参加できる、こういうことをいつも念頭において活動すべきだと思いました。
- ・プロジェクトを通して学んだことは、地方自治体の実態は現場でしか知ることができないということです。私は地方創生に関心を持っていたので、大学で地域格差の問題やその解決方法を学びました。しかし、教室で得た知識はどれも理論的で応用性がありませんでした。安芸市の方々は、地元の人口が減りつつある中で、どうしたら特産品の「じゃこ」をより多くの人に知ってもらえるかを、私が学んだこととは違う切り口から、必死になって考えていました。以上のことから、私は、大学で学んだことをただ実践するのではなく、地方自治体の実態と照らし合わせて、地域の方々と協力してまちづくりを行うことが重要だと思いました。
- ・ボランティアスタッフとして参加した際、宣伝を担当した釜揚げごはんの店が他の店よりも早く売れて嬉しかった一方で、宣伝という立場ではあるが、その店に対する熱い思いを間近で知ることができたことが一番学んだことです。宣伝の前に店を運営していた人や売り子の男の子になぜこのイベントに参加しようと思ったのかを聞くと、釜揚げごはんのおいしさを市民に知ってもらいたいからと話していたことがとても印象的でした。そして、2つ目はこのイベントのかじ取りをしているのが男性ではなく女性であり、庶民に人気な女性であるからこそ多くの人々がイベントに参加したのだと感じた。何よりも人情味があり気配り上手であり彼女の言葉はボランティアである自分にも響いた。ただイベントに参加するだけでなく、地域活性という目標を達成するためには人の力というものが必須だということを学び、地域の経済を活性化することは最終的には日本の経済の活性の一助になると考える。
- ・今回のFWで最も強く感じたのはミクロな視点から生まれる「主体性」と「温かみ」が地域を盛り上げていくということです。1日目が終わると出店者同士はライバルであるにもかかわらず「みんなお疲れ様！」とねぎらい、2日目も「元気じゃこ、頑張るじゃこ、楽しむじゃこ！」のスローガンのもと誰も疲れた表情1つ見せずに笑顔でサミットを楽しんでおられる姿を目にしました。本当に地域の皆が「じゃこ」に誇りをもち、「団結力」を持っていて、「温かい」と思えるコミュニティーでした。まずは「地域を活性化したい」というマクロな視点ではなく、「じゃこを通じて仲の良いコミュニティーを作る」というミクロな視点から始め、住民全員が地域おこしの主体となる環境を作ることが第一歩なのだと感じました。
- ・“安芸市のコミュニティーの繋がりや強さや温かさこそが安芸を支えているということ”を学びました。他県からじゃこサミットに参加している方もいて、地元で働く方が稼げるが暖かくて楽しい皆がいるから安芸に来ると言っていて、原力はここにあるのではないかと思います。安芸のじゃこを知ってもらうためボランティアやコンサルタントと協力し全力で活動している安芸の皆さんを見ると安芸への

思いや結束力を感じました。またじゃこゼミナールへの集客係担当になり前日は客が0人で開講されず、少しでも貢献したいと思い一人一人声をかけ最高で16人集まりました。16人集めるのも大変で断られる場合や相手にしてくれないこともあり現実の厳しさを体感しました。今回の活動を通し「百聞は一見に如かず」という言葉があるように実際に現地に足を運ぶことで感じるものが多くありました。又地方活性化のためには現地の人々の力だけでは限界があり他県の若者が出向き地元で安芸の魅力を持ち帰りPRすることがいかに大切だと学びました。

#### ■参加学生が今後の学生生活に活かしたいこと、課題

- ・しらすサミットで出会った、安芸市を盛り上げようと活動されているゆかりさんという方とまちづくりやしらすサミットについてお話しするなかで、一度できた小さな関係を大切にすることが大切だと感じました。上記にもつながることですが、小さな繋がりが助け合いとか、いい意味で持ちつ持たれつの関係になっていく、そんな出会いを大切にしたいと思います。また大切にしたいと思えるような出会いがある場に自分をずっと置いていきたいと思いました。今回しらすサミットに参加し、まちづくりの中心にいる方から多くのお話を聞いたことで、もっと地域に関わりたい、まちづくりを知りたいという思いが強くなりました。前から地方に興味はあったけど、実際に何をしたら良いのか自分ではわかっていません。今回の体験で少し見えてきたかなと思います。これから聞くだけじゃなくて、実際にやってみるということを繰り返し、自分のなかでの核となるものをしっかり考えていこうと思います。
- ・私は将来「食」という観点から日本の地域にしかない良さを国内外に発信し、日本の地域を守っていきたくて考えています。そのために今回学んだことを活かし、まずは若いうちに地域の現場に赴き、全国にコミュニティーを作りたいです。そして築きあげたコミュニティーを利用して、今度はマクロな視点から日本の地域を発信していきたいと思います。具体的には2025年の万博を大阪で開催する動きが加速しており、万博などの世界的なイベントを使って海外に向けても地域と食文化を共有できる人材になりたいと考えています。現在世界人口は増加する一方でいずれ食料が枯渇するなんてことも言われています。その中で日本の優れた食を守ることは日本の和食ブームのさらなるイメージアップにつながり、ひいては日本の地域全体を守ることができる、そう信じています。
- ・今回のプロジェクトに参加したから、情報は目で見ると、具体的にはテレビで見るだけでなく、実際に現場に赴くという姿勢が大事だと学びました。大学4年生はもう終盤で、就職活動が終わり、自由な時間も同時に増えた。その間、何をしたらいいのかを考えれば、地域振興とはどういうものなのか、いわゆる社会問題をじっくり学んでいくことが大切であるということに気づいた。具体的には特定の地域ではどのような問題が起こり、どのような切り口からこの問題を解決していかなければならないのかを日々考えていかなければならないということを知った。今後はこのじゃこサミットで出会った人とまたどこかで会い、来年のじゃこサミットにもまたボランティアとして現地に赴きたいと考えるようになった。
- ・今回の活動を通して、地域活性化においてだけでなく、人生の生き方についても勉強させられました。スタッフとして働く前日に、現地の人たちと話していて、生きるとはどれだけ大変なことか、そばにいてくれる人を思い大切にすることがどれだけ重要か、「死ぬこと以外はかすり傷」とおっしゃる方もいて、また物事を捉える味方が少し変わり、自分の生き方を見直すきっかけになり、なにか胸がえぐ

られるような気持ちを感じました。普段の私が持つ価値観がどれだけ自分中心でわがままなことだったか、今の生活がどれだけ贅沢なことかを考えさせられました。また安芸で出会った同期の子たちや年下の子から感じたことは、自分の人生を自分自身で考え、しっかり自立して自由な、そして何より楽しんで、また強く生きているように見えました。就職活動も始まり、決断をする機会が増え、人生について考えなければならない時期が来ます。その時、この安芸で出会った方々の生き方を思い出し、自分にとって何が必要で大切なのか考えていきたいと思えます。

- ・私は今までの2年半、座学が中心で広い視野を持つことができませんでした。興味があった地域格差の問題のことも、教室で得た知識を基に「どうせ解決できないだろう」と薄々諦めていました。しかし、今回のプロジェクトに参加したことで、地方自治体の実態を肌で感じることの重要性に気付きました。座学で学んだことを鵜呑みにするのではなく、本当にそれが事実なのかを確かめる習慣が私には足りませんでした。残りの学生生活は、座学で学んだことを確かめるための研究に充てたいと思います。その手段として、自分の足でいろんな地域を訪れたり、文献を読みこんだりしたいと思っています。